



国定忠治の磯沼浚渫工事

その2

東日本建設業保証株式会社
建設産業図書館
江口知秀
Tomohide Eguchi

国 定忠治の墓がある養寿寺の山門前で行き会ったご老人は、忠治を彷彿とさせる貫禄のお顔立ちだが、横浜から墓を訪ねてきたのだと言うと、大変喜んで「やるな」と柔和な笑みを絶やささない。いい機会だから磯沼の場所を聞いてみることにした。「ああ、あれなら『あずまスタジアム』の北側だよ。もうないよ。畑になっちゃったから。子どものころよく遊んだよ。クレソンなんかも生えていてね。へびもいっぱいいた。」

ご老人は念のためにと、「社長」と呼ぶお知り合いにも確認してくれた。「社長」によれば北ではなく、市営球場「あずまスタジアム」の北西らしいが、いずれにしても、その辺りに間違いなさそう。さっそく、磯沼があったという場所へ行ってみることにした。それにしても磯沼浚渫工事は、本当のことだろうか。忠治がなわばりを救済しても不思議ではない。博徒の収入源は賭場からの寺銭であり、なわばりが死滅すれば、自分も運命を共にすることとなる。また建設業の黎明期には、博徒が請負業者として鉄道建設などに携わっており、彼らは人足を確保するために賭場を開き、それは黙認された。忠治も労働力をストックするかわら、寺銭を工事費に当てるといって「一石二鳥」の策を講じたのかもしれない。

ただ気になることがある。羽倉外記の『赤城録』からは、天保七（一八三六）年が旱害で大飢饉となつたので、その対応策として翌八年の春に忠治が磯沼の浚渫工事を行ったように読み取れる。たしかに、七年は「天保の大飢饉」にあたるが、これは旱害ではなく全国的な冷害や多雨によって引き起こされたもので、この地方でも雨が降り続いていた。ここが『赤城録』の記述と食い違う。赤城山南麓は旱害の常襲地帯なので、いつ灌漑用池を整備してもおかしくはないが、わざわざ風雨が吹きすさんだ翌年の春に行うだろうか。

むしろ、天保八年が旱害にあっており、用水確保が必要な状況にあったらうから、忠治の工事が翌九年の春であれば、『赤城録』の記述どおりで納得がいく。『赤城録』によると、浚渫工事を行った天保八年の三月二十八日に、忠治は賭場を役人に急襲されて、会津へ逃げたことになっている。しかし、国立歴史民俗博物館名誉教授の高橋敏氏によれば、これは天保九年三月二十六日のことであるという。このように直近の日付にも誤りが指摘されているのであれば、磯沼の浚渫工事も天保八年ではなく九年の春のことだと考えたい。

さて、磯沼があったという場所は、やはり畑にな

ついでに面影は微塵もない。古い地図などで正確な場所を確認すべきかとも思ったが、やめておくことにした。忠治さんが、あのご老人に成りすまして、この場所を教えてくださいましたよ。うれしいねえ。横濱から俺のことを訪ねてきたって？うれしいねえ。なに、磯沼？わからねえのか？それじゃ、教えてやんべい。そう考えるほうが愉快なので、このまま国定を離れることにした。



磯沼があったという
「あずまスタジアム」北西側の風景

[交通] あずまスタジアム北西側まで
JR両毛線 国定駅から徒歩約30分